

桃澤如水の蕭白画博搜

山口 泰 弘

○はじめに

江戸時代中期京都の画師曾我蕭白（一七三〇～八一）の画跡は、京都に留るものではない。その範囲は播磨・丹波・近江・大和・伊賀・美濃など周縁地域に広がっているが、特に伊勢地方には、漫遊に纏わる逸話とともに作画の痕跡が多く残されている。伊勢地方を中心とした三重県域を博搜して各地に散らばった痕跡を丹念に拾い集め、記録として残したのが桃澤如水（一八七三～一九〇六）という人物であったことは、すでに蕭白に係わる多くの著述で語られているとおりである。

桃澤如水（以下如水と記述）は、日本画家・歌人。本名は重治、画号を如水また桃画史、歌名を茂春と称した。信濃に生まれ、明治二十三年（一八九〇）、東京美術学校日本画科に入学し、橋本雅邦の指導を受けた。卒業後、病を得た如水は、療養のため三重県津市に移り、一身田の真宗高田派総本山専修寺附属中学校の教師兼舎監となつて国文学を教えた。その傍で伊勢地方全域及び伊賀地方を博搜し、百数十年を経て遺る蕭白に纏わる逸話を採集し画を実見し情報を収集した。次第に病が悪化した如水は、明治三十九年（一九〇六）に三十四歳で早世した。

博搜の成果は、雑誌『日本美術』（八十五・八十六・八十八号 日本美術院 一九〇六年）誌上に「曾我蕭白」の標題、「三六生」の筆名で発表された。さらに没後、『三重県史談会々誌』（第二巻十一～第三巻三号 一九一一・二年）に改めて掲載された。同誌に再掲される際、友人三村秋良（以

下秋良と記述）¹⁾によって補記が加えられ、その有用性から今日、『三重県史談会々誌』再掲の「曾我蕭白」が伊勢地方における蕭白の事績を検証する基本文献として高い評価を受けている。本稿でも同誌版を底本として記述を進めていく。

蕭白の伊勢地方における活動に関わる研究の多くが如水に拠っている。如水は、思うにまかせて漂泊する気ままな異人として蕭白を描き、歓待と排除という対照的な感情を複雑に交錯させながらもてなす地元の人々と、人々のあいだに漂う微妙な空気などどこ吹く風といった風情の当人とのユーモラスな交渉を描く逸話を描いている。

如水の記録の恩恵を受けた最初の調査とそれに基づいた研究は辻惟雄氏によるもので、その成果は昭和四十五年（一九七二）に論文「伊勢の蕭白画」（國華 九五二号）で発表された。今日重要文化財に指定されている「永島家襖絵」（全四十四面中二十七面 三重県立美術館蔵）「唐獅子図」²⁾「双幅（松阪市朝田寺蔵）、あるいは蕭白としては珍しい極彩色の「雪山童子図」（松阪市継松寺蔵）、「千方牛和尚像」（松阪市菅相寺蔵）、「小野小町大伴黒主図」双幅（伊賀市個人蔵）といった画の存在がほぼ如水の記録どおり確認されたのであった。

その後、筆者も同誌に基づいた調査を実施しており、「永島家襖絵」（全四十四面中残された十五面 三重県立美術館蔵）「達磨図」衝立（鈴鹿市安養寺蔵）、「旧興正寺障壁画」（四日市市個人蔵）、「青砥藤綱韓信図屏風」（鈴鹿市個人蔵）などを加えることができた。その結果は、「伊勢の曾我蕭

白」(國華 一一五号 一一九一年)、「曾我蕭白の遊歴」(國華 一一六一号 一一九二年)や展覧会及び図録「江戸絵画の鬼才 曾我蕭白展」(一九八七年 三重県立美術館・練馬区立美術館)、「三重の美術風土を探るII その後の曾我蕭白と周辺」(一九九二年 三重県立美術館)で報告している。

本稿では、如水が記録にとどめた画に焦点を当てて、記述内容を吟味しながら、如水当時の状況と現況、画様について個々に記述することで、伊勢地方における蕭白の制作背景や画風の特徴を明らかにしていく。

論文「曾我蕭白」(『三重県史談会々々誌』所載 以下「曾我蕭白」と記述)は、『三重県史談会々々誌』に四回にわたって掲載された。表題及び項目は以下のとおりである。

□三重県史談会々々誌第二卷第十一号

曾我蕭白

故桃澤茂春 稿 友人 三村秋良 補

三村秋良序

桃澤如水序

曾我家系図(秋良による補記)

蕭白の幼時及其師(秋良による補記)

敬輔画系(秋良による補記)

□三重県史談会々々誌第三卷第一号

曾我蕭白(其二)

故桃澤茂春 稿 友人 三村秋良 補

伊勢の漫遊

漫遊中の軼事

□三重県史談会々々誌第三卷第二号

曾我蕭白(其三)

故桃澤茂春 稿 友人 三村秋良 補

(承前)

画題及画風

□三重県史談会々々誌第三卷第三号

曾我蕭白(承前)

故桃澤茂春 稿 友人 三村秋良 補

(画題及画風承前)

蕭白の落款

門人

(明治三十九年春稿了同四十五年二月秋良補)

○「曾我蕭白」に現れる蕭白画

京都の画人蕭白がいかなる所以で伊勢地方と関わったかは定かでない。「曾我蕭白」で、秋良は、伊勢久居(現三重県津市)の米屋に奉公していた小僧がふらりと消えてのち、京都で画人になった、それが蕭白である、という伊勢地方の風説を記している^②。

蕭白一族の菩提寺である京都上京の興聖寺の過去帳によって、京都の商家丹波屋あるいは丹後屋吉右衛門の次男として京都に生まれたことが明らかにされており^③、現在では京都出生が通説となっている。

しかし、興聖寺は、菩提寺としてだけではなく、蕭白と伊勢地方とを結び付ける紐帯としての意義も合わせて持っていたと考えることもできる。当時伊勢地方を治めていた津藩の藩主藤堂家が同寺の大檀越であったから

である。本堂の須弥壇横には明代の造像とされる達磨像が安置されているが、これは、藩祖藤堂高虎が、文禄・慶長の役で朝鮮半島に渡海した際に持ち帰り、同寺に寄進したものと伝えられる。また、津市の近田山長谷寺は、二代藩主高次が万治三年（一六六〇）に興聖寺から拙堂和尚を招いて中興開山とし、藤堂家歴代の祈願所としたが、これも興聖寺と藤堂家に深いつながりがあったことを示す例である。このように、蕭白と藤堂藩を繋ぐ紐帯の役割を果たしているのが興聖寺である。

興聖寺は臨済宗興聖寺派総本山で、津には末寺のひとつ浄明院がある。寺院本末のネットワークが、蕭白の伊勢漫遊を促す契機となったとも考えられる。浄明院にはかつて蕭白の描いた襖絵があったと「曾我蕭白」に記述されているが、この件に関しては後述する。

如水は、「伊勢の漫遊」の項の冒頭で、師とされる高田敬輔没後、二十七歳ころから伊勢漫遊を始めたとして、その契機を「第一になつかしい我郷国に東山時代の復古されたる吾人神の技術を止めんものと冲天の意気を以て此処に漫遊を試みたものと思ふ」と高らかに語る。如水は、蕭白の伊勢漫遊を「故郷に錦を飾る」行為であったと捉えていたようである。続けて、「然しながら其漫遊のあとに就て考ふるに至極暢気で一処に短くて一箇月少し長ければ半年一年と滞在して毎日筆を執るでもなしに過して輿来れば一気に揮毫して山水人物忽にして成るといふ風で丸で何事もしないで居る様だが其時間は図に就て推敲して居るのであつて画いてしまへば忽に其処を去って次に行つて又其様にして居るといふ有様である」と、長逗留の挙句、一気に描きあげては立ち去るといふ、ぶらぶらといつまでも着手しようとしなない「芸術的怠慢」と一気呵成に描き上げる「天賦の才」を緬い交ぜにして漫遊が繰り広げられた事例に再三再四触れている。これは、後に触れる「興正寺障壁画」揮毫に係わる寺側の記述^④などからも裏付けられている。

以下、「曾我蕭白」における蕭白画に係わる如水及び秋良の記述を引用して、記述内容の分析と現状把握を順次行っていく。如水の記述箇所は冒頭に「如水」、秋良には「秋良」と表示する。

「如水」それで金銭に就ては少しも念がなく夫が為に食事も出来ない様が事が折々あつた様である今人の話を聞に松坂の近辺の村落に豪農があつた其人が他出した帰り途に金剛坂の下まで来ると一人の青年が路傍に打倒れて居て其頭にあたり頭に頭蛇袋と筆らしいものが放り出してある其人は親切に呼び起して見て見ると己れは画家だが空腹のために最早歩行も出来なくなったから寝て居るのだと聞ては捨て、置くわけにも行かず親切に家に連れ帰った、之れ蕭白の伊勢に足を止めて画を描た初めの様である此処は高木とかいふて十畳の座敷の三方に梅が一面にかいてあるとの話である

松坂近郊の豪農が頭陀袋と筆を放り出して路傍に倒れている若い男を連れ帰ってみると、それが蕭白であった。そして、蕭白は「十畳の座敷の三方に梅が一面」に描いたと如水は記す。これは如水の誤認であり、この時描いた画は、梅を画題としたものではなく、「永島家襖絵」（三重県立美術館蔵）であることが豪農すなわち永島家の口伝からわかっている^⑤。また、永島家は、斎宮という伊勢街道沿いに長く延びた集落にあり、「高木」ではない。「高木」なる集落は、斎宮の西北西二キロメートルほどのところにあり、「高木」で描いたかもしれない梅の襖絵に関する言い伝えと永島家への襖絵揮毫の由来譚とが輻輳したことも想定される。「高木」の集落にある寺院にこの旨を照会したが、同寺および集落内では梅の襖絵は確認されなかった。また、永島家の襖絵は、蕭白二回目の伊勢漫遊時の作であることが定説となっており^⑥、「蕭白の伊勢に足を止めて画を描た初め

の様である」とする如水の考証とのあいだには齟齬がみられる。

永島家は、当時家屋（おそらくは現在は破却されている主屋）を新築しており、その襖絵を蕭白が手がけることになった。後に、明治天皇の伊勢行幸に際して、御座所として使用に供されることになって改装されたと考えられる離れ座敷（十九世紀前半の建築になる現在の主屋）を飾るために移設されたものと考えられる⁷⁾。現在は三重県立美術館の所蔵となっているが、四十四面を数えており、現存する蕭白画としては最大規模を誇っている⁸⁾。

〔如水〕松坂近辺の集落高木 襖 梅図

〔現況〕永島家襖絵（三重県立美術館蔵）

弘 泰 山

〔如水〕此処（如水によると高木の某家、事實は斎宮の永島家）に何箇月か居て夫から松坂の岡寺山といふに大幅の半化捨身の極彩色を止め久居にも居、津に来て藤堂家にも暫く居た様だが天然寺や浄明院に一年許も居て黒田の浄光寺に一年許り椋本辺にも居た様だが或家に太公望を描たといふ外は分らない

「松坂の岡寺山といふに大幅の半化捨身の極彩色を止め」とある画は、蕭白の彩色画の代表作とされる「雪山童子図」（松阪市継松寺蔵）に同定される。継松寺は山号を岡寺山と称し、地元では「岡寺」が通称として膾炙している。しかしこの画は、同寺のために描いたのではなく、松坂で蕭白が催した画会で商家から注文を受け、釈迦の前世譚が仏寺に相応しいという理由で、十九世紀に入って同寺に寄進されたことが明らかになっている⁹⁾。

「久居」「藤堂家」「天然寺」「浄明院」「浄光寺」における作画について

は後述する。

〔如水〕松坂 岡寺山 大幅の半化捨身の極彩色

〔現況〕雪山童子図 松阪市岡寺山継松寺蔵

〔如水〕朝田の地蔵にも蕭白の遺墨がある本堂の壁には墨絵の獅子で右は岩に噛みついた形左は滝にうたれてゐる所右の方は平安蕭白、左の方は皇園散人曾我暉雄と款して印はない又庫裡の杉戸二ヶ所は表は何れも極彩色の極めて形の整つた落付たもので裏は墨絵である表の方は表が桐に鳳凰、裏が萩に兎で落款は蛇足裔蕭白軒曾我暉雄画とあつて印はなし乙は柳に月がかかつてるて下に激流が少し見江て猓が頭を回してゐる背向の図、裏は老杉に月、落款は彈正宗暉人道蛇足軒十世曾我暉雄画とあつて「宅鸞斎」と云ふ瓢形印と「蕭白」といふ角印「如鬼」といふ鼎形印とが朱で描いてあった、此外に障屏の類もあつたさうなが破れたり持出されたりして残つて居らぬと云ふことである残らぬもの豈障屏のみならん口碑も多くは失はれてしまふ

「朝田の地蔵」は、松阪市朝田寺の通称。平安初期の本尊「木造地藏菩薩像」（重要文化財）が通称の由来となっている。「墨絵の獅子」すなわち「唐獅子図」は、本尊を左右から挟むかたちで、本堂左右の壁に阿形卍形として貼り付けられていたもので、現在では大幅の双幅に改装されている。障屏画としては、他に文中にある桐に鳳凰（表）・萩に兎（裏）杉戸、柳に月と猓（表）・老杉に月（裏）杉戸（辻氏の論文では「桐に鳳凰図」「萩に兎図」「月夜靈獣図」「旭日に杉図」）四面が残されている¹⁰⁾。

「唐獅子図」は、「寒山拾得図」（京都市興聖寺蔵）とともに、大筆による力強い草画様式の典型として蕭白を代表する作となっている。「平安蕭

白」「皇園散人曾我暉雄」と署された異例ともいえる巨大な落款は、京の画師たる蕭白のプライドとブランド意識の誇示とも解されるが、画筆で書かれており、一気呵成に描き切った後に書筆に持ち替える寸暇さえ惜しんでそのままに暑した蕭白の高い高揚感を示しているようにもみえる。

〔如水〕松坂 朝田の地藏 墨絵獅子図

桐に鳳凰(表)・萩に兔(裏) 杉戸

柳に月と猿(表)・老杉に月(裏) 杉戸

〔現況〕「唐獅子図」双幅 重要文化財

「桐に鳳凰図」「萩に兔図」杉戸画

「月夜靈獣図」「旭日に杉図」杉戸画

その他、「曾我蕭白」に記述のない作品「唐人物図屏風」「布袋図」「鶏図」

〔如水〕夫から上野白子を経て日永の輿正寺に一年程居て其後は四日市の方へ行つたかどうか未だ其辺は調べが届かないが遂に伊賀へ行つた様である

松坂近辺での作画のあと、蕭白は北上し、上野(現津市安濃町上野)白子(現鈴鹿市白子)から日永(現四日市日永)を経て四日市へ、更に伊賀地方へと漫遊を続けて行つたと如水は記す。一年に及ぶという「日永の輿正寺」逗留時における作画については後述する。

〔如水〕夫で津の西来寺の画には二十九歳黒田の浄光寺のには宝曆九曾我氏三十歳筆の落款があるから此処にも一年許り彼処にも一年許り滞在した

といふ話を全く信ずる訳には行かない大概話など、いふものは永い事を半年とかいふからではあるが一所に長く滞在した事は実際であるから其話のある地に就て筆蹟や話を集めて見度と思ふが思ふ許で

西来寺(津市)の画には二十九歳の年紀があったという。蕭白画には年紀のある画が少なく、蕭白画としては初期に属する二十九歳作は、画風変遷の初期を知るうえで貴重な事例となったはずであるが、惜しいことに現存しない。また、「黒田の浄光寺」(津市)の画には、「宝曆九曾我氏三十歳筆」の年紀と制作時の年齢が併記されるという蕭白唯一の事例であり、この併記によって、蕭白の誕生年が明らかになった点で重要な事例であるが、これも現存しない。これらの画の画様については後述する。

〔如水〕松坂に近く雲出川の岸で一方は海に臨んで香良洲神社といふ有名な社がある其入口は長い堤で其左右に今は若木であるが其頃は老木の楼が並木に植ゑられてあつた或春の夜の月に照らされて花陰を逍遙して月夜の桜は如何に描かば其風情を写し得るかと頻りに苦心焦慮して夜更くるまで此処に居つた時に村人が其怪しき姿を認め若しや盗賊などの徘徊するのであるまいかと捉えて誰何したら己は画家であるが夜桜を描かうと苦心して居るのであると聞いて許した其時の画は香良洲神社の社司の家にあつたのを松坂の三井が懇望して其有に帰したが先年暴徒の蜂起した折に其等の為に破却せられたといふ事である

雲津川の河口、香良洲神社(津市)で苦心慘憺して夜桜を描いたといふ逸話が描かれる。社家にあつたものが松坂の豪商三井家の懇望により同家に帰したが、暴徒の蜂起によって破却されたという。「先年暴徒の蜂起し

た折」とは、一八七六年（明治九年）十二月に三重県飯野郡（現三重県松阪市）から始まり、愛知県・岐阜県などにまで拡大して、当時最大規模の騒擾事件となった地租改正反対一揆、いわゆる伊勢暴動を指すのであろう。その際に破却されたという。

「如水」香良洲神社社家 夜桜図 暴徒の蜂起で破却

「現況」現存しない

「如水」又久居侯の命で金屏風を描くことゝなつた蕭白は久居侯の食客となつて毎日酒をのみ御馳走を食つては其まゝ寝てしまつたり何かする家老は今日は描くかしらんと思つては御機嫌をとつて文酒をすゝめ御馳走をするが又前の通りで描き相にもない暫く我慢はして居たがあまり甚しいから或日催促をした夫では描くといふことになつて沢山に墨をすらせ夫を摺鉢に入れ其内へ紺青金泥など貴い絵具を凡そ十五両程買ふたのを皆其摺鉢の墨に交せて棕櫚箒でかきたてた家老や家来は何をかくかと見てみると金屏風一双を併べて其処へひろげさせ棕櫚箒を把つて湾曲した一線を描いて其徐勢を以て家老の顔を塗つたまゝ瓢然と去つてしまつた家来は此侮辱を非常に怒つたか巳に去つてしまつた後で致方がない其内に墨の乾いた処に何やら意味ありげに思はれる全く乾いて見たら七色燦たる虹霓が現はれた此屏風は久居侯の珍藏であつたが維新の際宝庫を出て、他の手に移つたとか

藤堂藩の支藩久居藤堂家から揮毫を依頼された蕭白の奇矯な振る舞いと面目躍如たる異能ぶり、戸惑いを隠せない藩の人士の有様が描かれている。芸術的怠慢が単なる怠惰ではなく、結果を予測して入念な構想を練るための溜めをつくる時間であり、それが一気呵成の描画と結びついた時人の意

表を突く結果をもたらした、蕭白の天賦の才を示す顕著な例といえる。このとき描かれた「虹図屏風」は、久しく久居藩主家にあつたが、明治維新に至つて同家を離れ、現在に至るまでその所在は明らかではない。

「如水」久居藩主邸で描いた金地に虹の屏風 他の手に移る

「現況」不明

「如水」津市の寺町に天然寺といふ浄土寺がある其寺の本堂も庫裡も白い所は悉く蕭白が筆を残したといふが惜しい事には先年烏有に帰して今は其やけあとが憐に見らるゝ許である今人の話を聞くに第一室に蓮がかいてあつたが其画が珍妙な形で丸で子供が墨をなすくつたより不思議なものであつた夫は天然寺の方丈が不味いものをくはして一向に不あしらいであつた処へ催促させられたものだから御機嫌甚だおもしろからずして夫で斯の如き画が出来たのだとか又一の話には毎日々々酒をのみ碁を囲みて其他に何もしい其内或日の事小僧に墨を磨らせて沢山にすれた頃大筆を出して夫に一杯墨を含ませ筆を援いて小僧の顔をためし皿に代用して塗つて居る処へ今一人の小僧が来たから之にも塗つて其筆で一室残らず馬をかいともいふ

「天然寺」の本堂及び庫裡に蕭白が描いた障壁画群は、「本堂も庫裡も白い所は悉く蕭白が筆を残した」という規模の大きなものであつたらしい。しかし、如水の記述及び寺伝によると、火災によつて堂宇もろとも烏有に帰した。如水が聞いたところでは、一室に蓮、それも子ども落書きのよくな珍妙なかたちをしていた。また一室はすべて水墨の馬が描かれていた。子どもの落書きのような画は、後述する「興正寺障壁画」にもみられる。

火災に先立つ明治三十二年（一八九九）ころ、美術雑誌『國華』の編集

者が津市に天然寺を訪ねたことがあり、幸いにも焼失前の天然寺襖絵の記録を残している^①。それによると庫裡を飾る蕭白の襖絵は、すべて水墨画で、如水の挙げた画題——蓮・馬・羅漢——のほか、達磨や山水を描いたものがあり、庫裡だけで大小併せると襖四十六枚におよぶ、現存最大の「永島家襖絵」（四十四面）を超える大規模なものであったという。

〔如水〕津 天然寺の本堂・庫裡 蓮図

馬図

羅漢図他

全四十六面 烏有に帰す

〔現況〕現存しない

〔如水〕津の浄明院は藤堂侯の夫人の墓のある寺で此処に蕭白が一年許も滞在して居た其処の襖には鶴が一面にあつたといふが今は張かへてないことや余の一知友が寺の方丈と心安くて其内の一枚を貰つて来て表具師の処へやつて仕立るつもりにしたのを表具師は又何処ぞへ売つてしまつた鶴は真に羽化登仙したのである先日院を尋ねたが生憎方丈が居なくて話を聞く事が出来なかつた

既述のように、浄明院は、浄土宗興聖寺派の末寺であつた。寺院の本末関係が画人の活動をネットワーク化する例はこれまでも知られている。たとえば、安土桃山時代の画人長谷川等伯は、生国の能登で七尾を中心に壮年近くまで活動を行った後京都に上るが、その際檀家であつた日蓮宗本延寺の本山である本法寺を頼っており、その縁故で京都での活動域を広げていった。また蕭白と同時期に京都で活動した池大雅は、友人で書家、松坂

の豪商中川家の当主でもあつた韓天寿の屋敷に隣接する真言宗継松寺をしぼしば訪れ、住持の無佞と懇意になり、その紹介によって高野山で、遍照光院に代表作「山水人物図・老松図」襖絵十面を描く機会を得ている。

藤堂家が興聖寺の大檀越であり、浄明院は、一方で、藤堂藩の三代藩主高久が祈願所に定めた寺で、藩ともつながりをもっており、このような寺檀関係と本末関係が然り合わさつて、浄明院における蕭白制作の機会が生まれたと考えることもできる。浄明院は、江戸時代、津城下で寺町を形成していた区域にあつた。

浄明院には、如水によると、蕭白は一年ばかりも滞在して、襖一面に鶴を描いたが、如水当時すでに張り替えてなかつた。如水のニュアンスでは、貼り替えたものの、必ずしも廃棄したわけではないように受け止めることもできる。しかし、第二次世界大戦末期の昭和二十年七月二十八日の空襲で地域の大半が焼失した際に旧寺町にあつた浄明院をはじめ、天然寺、西来寺も災厄を免れず、堂宇が烏有に帰したため、多くの文物が運命をともしたものと思われ、現存は確認できない。

〔如水〕津 浄明院 鶴図襖絵 張替え

〔現況〕不明

〔如水〕寺町の西来寺に蕭白の襖がある図は竹林の七賢で夫には行年二十九歳とある狩野家では行年をかくのは六十一の還暦が過ぎてから行年何歳とかくと聞いたが蕭白の様な例があるのか夫共蕭白の独創か

如水は、浄明院と同じ津の寺町にある西来寺で竹林七賢図を実見する機会があり、「行年廿九歳曾我蕭白図」つまり二十九歳の年紀を目撃してい

る。二十九歳という、出生から青年期までの事績がほとんど不詳の蕭白がはじめて歴史に登場する年齢で、本拠の京都ではなくこの地に最初の足跡を残していることは、蕭白の画歴を明らかにするうえで興味深い。如水は実見したものの、現存はしていない。

如水の記録にはないが、西来寺に隣接する上宮寺という真宗高田派系寺院には、初期画風を示す双幅が残っており、おそらくは、同時期に制作の機会を得たものと思われる。この双幅は、右幅が小野妹子、左幅が迹見赤傳という、いずれも聖徳太子に関わる人物を描いた画幅で、同寺内にあった太子堂の本尊木造聖徳太子孝養像の脇掛として使用する目的で依頼を受けたと推定され^⑩、漫遊中不意に訪れた制作機会ではなく、大規模な制作依頼に基づくもうひとつの制作実態を思わせる。菩提寺興聖寺と浄明院との本末関係、藩主藤堂家と興聖寺との寺檀関係がその契機を生み出したとも考えられる。

弘 泰 口 山

〔如水〕津 西来寺 竹林七賢図襖絵

〔現況〕不明 遅くとも昭和二十年七月二十八日の空襲で焼失か

〔如水〕黒田村といふは津市を去る事二里許の村落である此処に浄光寺といふ寺があつて中々大寺である此処に蕭白が来て凡一年許も居た夏の頃で蕭白は毎日日本堂へ行つては昼寝をして居た或日の事朝食もせず日本堂に居る様である又朝から寝て居るのかしらむと既に例になつて居るから別に不思議にも思はぬが昼になつても出て来ない夜になつても来ないから本堂へ行つて見たらば蕭白は居ないで其辺に梯子がある能く見ると内陣の左右の壁が真中に柱があつて九尺宛の張壁になつて居る其外に向つた処へ十六羅漢が描てあり欄間には葡萄が描てあつて当人は影も形もない蕭白は画を描

き終ると其まゝ何処へか去つたのであらふ此処の落款には宝曆九會我氏三十歳筆

無為に長逗留した挙句、一気に描いてふらっと去っていく、芸術的怠慢と天才を窺わせる逸話の典型が示される。既述のように、落款により、蕭白の生年が明らかになるが、画は現存しない。しかし画様について、如水は後段で詳細に記録しているので、改めて触れる。

〔如水〕白子党皆緋威の鎧きてと云ふ白子即鼓が浦の先に若松といふ所がある其処に大谷派の寺があつた或日の事本堂の縁に乞食でもないが風体怪しき一人が来て寝て居る夕方まで同じく居る和尚が堂の扉を閉ぢに行つた時に叱責して去らしめ様とした其時男が言ふには己は画家だが空腹の為に此処に寝てゐる訳だからと事情を話した其処で呼び入れて一宿させた其時に画家だといふても信じまいから此処の白い衝立へ画かしてくれ夫には空腹であるが酒一升をのましてくれと其一升を呑んで筆を執つて達磨を描いた其衣は一筆にはねてあるとの事だが達磨の顔が余り恐いので子供が指でつゝきぬいてしまつてある而して今此衝立は中御田村の安養寺にあるのはなし

〔若松〕現在の鈴鹿市の若松にある真宗大谷派の某寺で、一宿の礼として衝立に描いた達磨の画は、如水の記述どおり、同市中箕田の安養寺に所蔵されている。画様は、「達磨図」（個人蔵）と類縁が認められる。「達磨図」の一衣の描線が張り詰めた弧線であるのに対して本図では幾分弛みがあるが、さらに大きく差異をみせているのは蕭白独特の据えた眼力が本図では著しく減じている点であろう。これには理由があり、仔細に眼の部

分をみると、両眼とも放射状の破れを補修した跡がわずかに見え、その上からさらに瞳を描き加えたことがわかる。「達磨の顔が余り恐しいので子供が指でつゝきぬいてしまつてある」という記述を裏付けている。

この画は、如水の記述にもとづく博搜の成果のひとつとして現存が確認され、展覧会「江戸絵画の鬼才 曾我蕭白展」(一九八七年 三重県立美術館・練馬区立美術館)で初めて紹介された¹³⁾。

「如水」若松 大谷派の寺 達磨の衝立 中御田安養寺にあり

「現況」「達磨図」衝立 鈴鹿市中箕田 安養寺蔵

「如水」三重郡日永の興正寺といふには殆一年滞在して居て座敷の張つて一面に蕭白が筆を揮つたものゝ内違棚をつきぬけて老松を描たのなど余程見事なものであつた相なが四五十年前の地震の時に此室が倒れてしまつた為画は滅茶々々になつて今では一物も残らんとこの事

「一物も残らんとこの事」というように、現存の確認を行った形跡はみられない。伝聞を鵜呑みにしたようであるが、実際には一部が現存していることが確認され、前記の「達磨図」衝立同様、展覧会「江戸絵画の鬼才 曾我蕭白展」(一九八七年 三重県立美術館・練馬区立美術館)で初めて紹介された¹⁴⁾。寺伝『日永山興正寺史』によると、障壁画は書院を飾っていたが、如水のいう地震で損壊した後、近隣を流れる河川の氾濫によって残欠を残すばかりになつていた。檀家のひとり、それを貰い受けて屏風に仕立て直して保管していた。「老松図屏風」二曲一隻、「唐人物図屏風」二曲一隻、「雑画押絵貼屏風」六曲一隻の三件として残る。

本来は、「老松図屏風」が床貼付け、「唐人物図屏風」「雑画押絵貼屏風」

が襖および床貼付けの残欠であつたことが、紙継ぎや引手跡から推察される。しかし、いずれも本来の画題を示しているわけではない。殊に「雑画押絵貼屏風」は、複数の画題の残欠を縦横構わず六曲屏風の各扇に貼り付けている。

「老松図屏風」は、如水のいう「違棚をつきぬけて老松」に相当すると考えられる。一方、「雑画押絵貼屏風」は、「唐人物図屏風」と併せて、「伯牙断琴」および「鐘馗」を画題とする襖絵の構成する部材と、「老松図屏風」の一部または別個の松を画題とする貼付けの部材を寄せ集めたものと推定される。こうした現存の部材を再構成することによって、蕭白が興正寺において構想した主題と空間構成について、拙論「曾我蕭白「旧興正寺障壁画」の主題と空間構想」(三重大学教育学部研究紀要 第六十三巻 二〇一二年)によって考証を試みている。

「如水」日永 興正寺 老松図床貼付 地震のあと破却

「現況」「老松図屏風」二曲一隻

「唐人物図屏風」二曲一隻

「雑画押絵貼屏風」六曲一隻

四日市市個人蔵

「如水」軼事としては僅にこれだけであるが其他筆蹟の得に残つて居るといふもので聞き得たものを記せば多氣郡斎宮に長嶋雪江といふ人がある此家の襖の両面に梅の絵がある安濃郡大塚村以前の庄屋倉田某の玄関の見付に山越の弥陀を描き其後光は傘の様であると河芸郡上野の或家の袋戸に小督と仲国の極彩色があつたが商人の手に入つて京都の方へ行つた伊賀上野の曾我忠兵衛忠友といふ家の衝立が小町と黒主の草子洗の極彩色である

この一節には、下記のような画が挙げられている。

- (一) 多気郡斎宮の長嶋家 梅の襖絵
- (二) 安濃郡大塚村以前の庄屋倉田某 玄関の見付に山越阿弥陀像
- (三) 河芸郡上野の或る家 小督と仲国の極彩色の袋戸
- (四) 伊賀上野曾我忠兵衛忠友家 小町と黒主の草子洗の極彩色の衝立

(一) 既述のように、如水は、松坂近郊の高木という集落の民家に「十畳の座敷の三方に梅が一面にかいてある」という伝聞を記している。描くに至った契機として、豪農が頭陀袋と筆を放り出して路傍に倒れている若い男を連れ帰ったとしているが、現在では、この逸話は高木ではなく斎宮で描いた「永島家襖絵」(三重県立美術館蔵)の発端とされている。豪農すなわち永島家には先祖から伝えられた口碑を後代の当主が聞き書きしたものが残されており、蕭白が泥酔しているところを連れ帰ったと細部には異動がみられるものの、概ね契機については一致しており、如水の伝聞は事実と齟齬を来している。

- (一) 不明。
- (二) 不明。
- (三) 不明。この画については、秋良の補記がある。

「秋良」倉田といふ大庄屋には蕭白は暫く滞在して居たが一向に描く様子もない或時某が出がけに蕭白に向つて時に私の処にも永く居られる事だからこの玄関の見付の杉戸に何か記念に認めてくれまいかと頼んだすると蕭白はあゝ画きませうと易々と請合つたさうなやがて某は用弁を済まして帰つて来て見るとあのなまけ先生がいつかいてくれるかと思つてゐた其玄関の杉戸には墨くろくろと描いてあるそれがものもあらふに山越の如來で背光の大きさは蛇の目傘位そして蕭白得意気に主人に向つて曰うだい面白

からう

芸術的怠慢と天才、人を喰った態度と、いずれにおいても蕭白の面目躍如たる逸話である。

(四) この画は、辻惟雄「伊勢の蕭白畫」(國華 九五二号 一九七二年)で紹介されている。如水は衝立として描かれているが、現在は双幅となっており、向かつて右幅に小野小町、左幅に大伴黒主が配される。この画のある「伊賀上野」(三重県伊賀市)は、津藩の支城があり、同藩の伊賀国経営の拠点であった。また、奈良を経て京都と伊勢を結ぶ大和街道・伊賀街道の要衝でもあった。辻氏によると、所蔵者の言として明治時代に入手したものであるということなので、この地で描いたものかどうかはわからない。しかし、京の画師蕭白が伊勢へ赴く枢要な通過点のひとつであり、同地で作画を行った可能性は大いにある。三重県立美術館が所蔵する「塞翁飼馬・簫史吹簫図屏風」は、裏打に使われた地方文書から伊賀地方で制作されたことが明らかになっている¹⁶⁾。この屏風の完成度の高さは、同地での制作が単なる通過点での一宿一飯の札などといった程度ではなく、如水が再三触れているような長期の逗留があった可能性を示唆している。

「如水」伊賀上野曾我忠兵衛忠友家 小町と黒主の草子洗の極彩色の衝立

「現況」 「草子洗小町図」 双幅 伊賀市個人蔵

「如水」伊勢地方に蕭白の偽物で屏風などに密画の山水や十二鷹などあるが其原産地は伊賀であるとか彼地には原本或は下図などがあつて夫を種に偽物を作る様である伊勢地方にも屏風の下図など原物大が残つて居るか

ら夫を以て推測することが出来やう

筆者も、伊勢地方で蕭白画を博搜する過程で数多くの贋作を眼にした。なかでも如水のいう「十二鷹」すなわち六曲一双の各扇に様々な鷹の様態を描いた図を押絵貼にした作例は贋作の定番ともいえるもので、かなりの数を披見することとなった。しかし、そうした明らかに贋作とされるものとは一線を画す「十二鷹」がある。四日市市の酒造家が所有するもので、四日市市史編纂のための調査段階で発見された¹⁶⁾。図様は他の贋作と一致するものの、比較的硬い描線を中心とする水墨の作風および落款印章は二十歳代終わりあるいは三十歳代初めの作風を示していることから、二十代後半まで画跡が明らかではない蕭白としては初期段階を示す貴重な作例で、三度に及ぶと推定される伊勢漫遊の初回に描かれたと推定される点で貴重である¹⁷⁾。

〔如水〕伊勢地方に蕭白の偽物で屏風などに密画の山水や十二鷹などある

〔現況〕「山水図押絵貼屏風」「鷹図押絵貼屏風」の贋作が伊勢地方に現存

贋作と図様は一致するが、画技の高度な達成度及び落款印章から伊勢漫遊初期の基準作と判定される「鷹図押絵貼屏風」六曲一双（四日市市個人蔵）が現存

〔如水〕其他には日本人物がある御伽噺の桃太郎鬼島征伐の襖二枚あるが此等は珍しい内で猶和漢の対には青砥藤綱の銭を拾ふ処と晋の予讓が衣をさく処とを釣したるなどがある両方とも屏風である

如水は、和漢の画題を対とした屏風の存在を示唆している。それは、青砥藤綱、廉直で公平な採決を下したことで知られる鎌倉時代後期の武士の銭に纏わる逸話と中国春秋時代晋の刺客予讓の逸話を一双の屏風に仕立てたものであったという。

同種のもので、和漢のうち漢の画題が異なる「青砥藤綱韓信図屏風」（鈴鹿市個人蔵）の存在が明らかとなり、三重県立美術館で一九九二年に開催された展覧会「三重の美術風土を探るⅡ その後の曾我蕭白と周辺展」で紹介された。

〔如水〕御伽噺の桃太郎鬼島征伐の襖二枚

青砥藤綱・予讓の屏風

〔現況〕類例として「青砥藤綱韓信図屏風」（鈴鹿市個人蔵）がある

〔如水〕他に鬼念仏や鬼が琵琶と瓢箪とを背負つて左の手に支那風の提灯をさげて走つて居る処などがある蕭白の鬼など、聞たら定めて凄いものであらふと推察するかも知らぬが些の凄味もない却て琵琶を背負つて居る鬼などは笑を含で居る偶滑稽に属するものがある

前述した「旧興正寺障壁画」の「雑画押絵貼屏風」の一扇に、杖に挿して瓢箪を背負う笑いを含んだ鬼が描かれている。これは、興正寺障壁画の復元案により、鐘馗を画題とする襖絵の一部であるという説を筆者は提示した¹⁸⁾。

〔如水〕鬼が琵琶と瓢箪とを背負つて左の手に支那風の提灯をさげて走つて居る

「現況」〔雑画押絵貼屏風〕からの復元による「鐘馗図」

「如水」心学の本と思ふたが其挿絵を描いてあつた事がある嘗て東京に居た頃其本を見つけて求めて置たがあまり上手な面白いものではなかつた様に覚江て居る

この記述に対して、秋良が次のように補記を加えている。

「秋良」これは恐らく奥田龍溪の著書『存心』であらうこれには龍溪の自序も交て居るとにかく蕭白の画は板下には適しまい、あまり上手な面白いものではなかつたのが実録である

弘 泰 口 山 『存心』は奥田龍溪（土龍）の著、享保十五年（一七三〇）の自序がある。龍溪は松坂の豪商、津藩の藩儒であつた奥田三角の兄に当たる。この書は民衆教化を狙いとする心学らしく豊富な挿絵で埋められているが、逸名の画家と龍溪自身の手になるものと蕭白が担当した挿絵が全二十八図収められている¹⁹。

「如水」黒田浄光寺のは九尺二枚づゝが内陣の左右にあるので一方は陸の羅漢一方は海の羅漢である姿勢に種々の変化あり其活動のさまは一々言ふ事は出来ないが意気の充分に籠つたもので幾分妖怪的ではあるが兎に角愉快な風采の多い細かに見れば形や何かに調はぬふしや無理な箇所も少しはあるが斯の知き面積の広きものを句々に筆を下して一気に成してゐる其技術に驚かざるを得ない此には常に見る如く濃墨の淋漓たるものがなく為

に前後の区別が稍判明を欠いて居るが之れは立ちつゝある壁に其まゝ筆を揮ふたから自然渴筆を用ゐし為である此をかく時傍で見て居たならば真に天馬の空をかけるが如き有り様であつたらふと思ふ為に全体の画面に沈着或は厚重など、いう処は遺憾ながら見出す事が出来ない欄間の葡萄の如きも甚だ騒がしきものであまり渴筆を用ひたが為に葉は丸で虫くひ葉の様である又甚だ大胆なる画きかたは三尺四方計りの羅漢の図のつゞきになる壁がある其処へは浪頭の指見た様なのを三本と其に連なる波の二三の線をかき其上に水玉の径六寸許で宝珠の玉より内の線を多くして螺旋にしたものを描いて位置をとつてある羅漢の四枚の内陣の方の一枚は一時寺が破損した時早く修繕をせなかつた為になんかの雨漏は其一枚を洗ひ蓋して少の墨痕も止めない様にしてしまつた漸く今になつて修繕にかゝつて居るが破損した画の方は如何ともする事が出来ない

近時間く所によれば普請の為に此壁画全部を崩すとか崩したとかいふ話である

浄光寺を實際に訪れた如水は、実見をもとに、異例ともいえる長文を蕭白画の委細と現況、その後伝え聞いた嘶に割いている。

浄光寺には水墨の羅漢図があつた。それは、本堂内陣の左右の壁三メートル近くにわたつて、一方が「陸の羅漢」、一方が「海の羅漢」を描いたものであつた。羅漢の容姿は「幾分妖怪的ではあるが兎に角愉快な風采が多」く、墨筆をもつて一気呵成に描いた「意気の充分に籠つたもの」であつた。

更に欄間には水墨の葡萄図があり、それは、渴筆を揮つた狂騒感の甚だしいものであつた。また、内陣羅漢図に続く三尺四方の壁には水墨の波濤図があり、「甚だ大胆なる画きかた」で描かれていた。

前述したように、浄光寺障壁画は、年紀と蕭白の年齢が併記されているために唯一蕭白の生年を確定できる証左となる点で貴重であるが、現存しないことが惜しまれる。筆者も、蕭白画博搜の過程で同寺を訪ねた際、住

持から紹介された檀家の古老に障壁画に纏わる話を聞くことができたが、古老は羅漢図を記憶しており、如水は「近時聞く所によれば普請の為に此壁画全部を崩すとか崩したとかいふ話である」と伝え聞いていたものの、事實は、その後も破却することなく、第二次世界大戦後まもなくに至って「気持ち悪いうえに汚くなった」ために、古老も加わって破却したとのことであった。

〔如水〕黒田村 浄光寺 本堂内陣の羅漢

波濤の貼付

葡萄の欄間

普請のため壁画全部を崩すとか崩したとか

〔現況〕古老の談によると第二次世界大戦後破却

〔如水〕極密のものでは以前藤堂家の桜の間と称して他藩の使者に応接する室の床に掛けられたものであつたが維新の時他の物と共に藤堂家を出て平民の手に渡つた二尺幅絹本の三幅封がある中が関羽と左右が岳陽楼と黄鶴楼の図で非常に謹みものである何れ津城下に滞在中命によつて画いたものであらふ関羽は鎧の上に抱を着用した所は他のものと同じだが青龍万は無しで只一人椅子に凭つた傍に机があつて細口の花瓶に蘭をいけ香炉を左にとり右に美髯をとりて薫じ居る所であるが威儀堂々として悠悠迫らざる越のあるは稀に見る作である左右の山水は例の鐵線見た様な線で丁寧な岩石を壘にあげ楼閣を現し下から上まで殆空地なきまでに画いてある此幅について一度模写して見たが一点一画苟もしてないから非常に骨が折れた

蕭白が津藩主藤堂家のために描いた中関羽、左右岳陽楼・黄鶴楼の三幅

対は、幅二尺の絹本水墨画であった。津藩は、蕭白が金屏風に虹を一筆で描いた久居藩の本藩にあたる。藤堂家で制作機会が与えられた背景には、既述のように、蕭白一族の菩提寺である興聖寺の大檀越が藤堂家であったことが関連しているとみることができよう。

岡田樗軒という江戸の書林の主が著した画論書『近世逸人画史』（一八二四年）では、蕭白の画について「其画変化自在なり、草画の如きは藁に墨つけてかきまはしたる如きものあり、又精密なるものに至ては余人の企及ぶものにあらず」と画域の振幅が極めて広いという認識を示している。既に触れた「唐獅子図」（松阪市朝田寺蔵）が草画を代表するものであるとすると、この三幅対は、樗軒に従うなら、その対極にある「余人の企及ぶもの」ではないほどの「精密なる」画であつたと想像される。如水は模写を試みたものの「此幅について一度模写して見たが一点一画苟もしてないから非常に骨が折れた」と嘆息するほどで、蕭白の高い筆墨の技量をものがたっている。

如水の手になる模本と蕭白の原本のその後の行方を、秋良は次のように補記している。

〔秋良〕此山水に柳が描いてあつたが其垂枝も例の禿筆でかいた様な太い剛いポツポツしたものであつたが如何にもやはらかく柳絲嫋嫋の感を写したものは後に聞く所によれば奸商に斯き奪はれて津市とか津市近傍とかの某家へ蕭白になつて納まつて居るとか原本の方は京都に行つてしまつたが摸物の方が却て高金であつたといふ事である

〔如水〕津藩主藤堂家 中が関羽左右が岳陽楼と黄鶴楼の絹三幅対

明治維新の際、平民の手に移る

〔現況〕不明

「如水」津市には大に蕭白好きな人が居て其屏風を五六隻も持って居其内に黄鶴楼の様な山水を十二枚張つたのが一双ある又非常に粗にかいたのも一双ある粗の方は山水四枚に鶴の真向き布袋か大きな袋のかけから頭と肩と僅に羽団扇の先を一寸現はしたる象の正面寿老正面牛の背面蝦蟇仙と鉄拐仙馬の正面とで皆減筆である其山水はおもに絶壁に楼閣などで使ひ古るしの刷毛に濃墨を充分に含ませ紙の半分を真黒にぬり上に楼閣を重き松を一本位添江て遠山を一刷毛にした様なものである

秋良は補記に、「恐らくは大門町白銀屋なるべし此主人も前年物故せり然し古書画は依然として今猶襲蔵せり」と記すが、現在所蔵は確認できない。

白銀屋には、蕭白の屏風が五・六隻あったと如水は記すが、そのうち、二双の六曲屏風について、画様を簡単に記している。現存しないため確認しようがないが、黄鶴楼の様な山水を十二枚張つた一双は、現存作に類例を求めるとすると東京藝術大学の「楼閣山水図押絵貼屏風」に類似する画様であったと想像される。また、減筆で山水人物鳥獸を描いた一双は、「減筆」で描かれているという如水の記述に従うなら、三重県伊賀市西蓮寺所蔵の「鳥獸人物図押絵貼屏風」六曲一双を類例として挙げることできよう⁽²⁰⁾。

「如水」津の大に蕭白好きな人

黄鶴楼の様な山水を十二枚張つた一双

減筆で山水人物鳥獸を描いた一双

「現況」不明

「如水」又或処に東方朔の画がある衣紋の大部分は破筆を用ひ左手に桃を

とりて高く指しあげ右手に羽扇をとりて何物をか招くが如く一足は地を踏み一足は半あげて恰も躍つて居る様な図で傍に童子が謹で桃を捧げて居る白髯の老翁の容貌は微笑を含んで少しも陰鬱な処はなく心持のよい画である又或処に寒山拾得の衝立があるが之れとて前同様である又子路米を負ふ図を写したが之れの顔は米俵を三俵負ふて其重さをこらへて歩行のさまに描であつて少し山賊的な所はあるが陰鬱の気はない又大公望を写したが出額で四角な様な目に微笑を含み口を開いて釣を垂れて居る処実に可愛らしき風のものである総じて宝曆八九年あたり即伊勢漫遊中の作には未だ何の不平等もなかつたかして蕭白の特色とする陰鬱とか凄愴とかの風は現はれて居ない様である

いずれも、特定の現存作に同定できるものはない。

しかし、蕭白の画に、社会との相克の中で形成されていった個としての認識がその作風として反映されたという視点が示されているのは、明治という時代を生きた如水らしいということができるかもしれない。明治の画家の幾人かが蕭白に強い興味の眼差しを向けているが、そのすべてが、「陰鬱とか凄愴とかの風」を蕭白画に見出し、近代的個性の先駆者として蕭白を意識しているからである。

「如水」東方朔図

寒山拾得図衝立

子路負米図

太公望図

「現況」不明

いずれも個人蔵

○おわりに

如水の記録とそれに基づいた伊勢地方の蕭白画の調査は、辻惟雄氏を端緒に現在まで続けられている。その間に「発見」された画は、本稿にみたとおりである。その多くが、辻氏及びその後の研究で二十歳台の終わりから四十歳代の初めにかけて、少なくとも三度にわたる、しかも長期の伊勢漫遊のなかで描かれたものであることがわかってきた。その結果、この時期が蕭白にとって画歴の高揚期と一致することが明らかとなっている。

【註】

(1) 秋良は、江戸研究者として著名な森銃三や三田村鳶魚とも親しい交渉があった在野の書肆学者で、如水に遅れて明治三十六年（一九〇三）にやはり療養のために伊勢に転地した。博学な彼の膨大な仕事は『日本書誌学大系 三村竹清集』（九卷 青葉堂書店、竹清は秋良の別号）に収められている。彼は転地先の郷土史にも強い関心を持ち、三重県史談会という地方史研究グループの創立に携わった。その会報への如水の仕事の再掲載は、彼の発意によるものであったと思われる。秋良が点綴する補記は、史談会の活動や交友を通じて地元に通暁するようになった人物の手になっただけあって示唆に富む内容では如水の本文に劣らない。

(2) 十二か或は四五歳まで久居（三重県津市）という所の米屋に小僧をして居たといふから、此近所の者らしい小僧をして僅かに得る小遣銭で豆筆を買ふて夫を以て畜を描て居たが其内に何慮へか行つてしまつたきり其後の消息を知らなんだ何年かの後其地の人が京都から帰つての話に米屋に居た一風変わった小僧は今京都で画家になつて居るといふ事を聞て米屋の主人が或時京都へ上つた序に蕭白を尋ねた其時米屋の主人は土産として金三両を包んで持つて行つた蕭白は其三両を以て悉く菓子を買ふて夫を悉くもとの主人の前に進めた主人が帰る時に其菓子を悉く子供衆へと負はして聞したといふ事を聞た

が其外には何もない

- (3) 辻惟雄「研究余録興聖寺の蕭白一族の墓および過去帳の記載について」（國華九〇五号 一九六七年）
- (4) 『日永山興正寺史』 一九八二年
- (5) 辻惟雄「伊勢の蕭白畫」 國華 九五二号 一九七一年
- (6) 辻惟雄「伊勢の蕭白畫」 國華 九五二号 一九七一年
- (7) 山口泰弘「旧永島家襖繪」再考」 三重大学教育学部紀要 五十五号 二〇〇四年
- (8) 辻惟雄「伊勢の蕭白畫」 國華 九五二号 一九七一年
- 山口泰弘「旧永島家襖繪」再考」 三重大学教育学部紀要 五十五号 二〇〇四年
- (9) 山口泰弘「伊勢の曾我蕭白」 國華 一一五二号 一一九一年
- (10) ほかに「唐人物図屏風」などがあるが、朝田寺のための制作かどうかは不明
- (11) 「蕭白」 國華 一一八号 一八八九年
- (12) 山口泰弘「伊勢の曾我蕭白」 國華 一一五二号 一一九一年
- (13) 詳細については、山口泰弘「伊勢の曾我蕭白」（國華 一一五二号 一一九一年）
- (14) 山口泰弘「伊勢の曾我蕭白」 國華 一一五二号 一一九一年
- (15) 山口泰弘「曾我蕭白筆 塞翁飼馬・蕭史吹簫図屏風」 國華 一二四六号 一九九八年
- (16) 『四日市市史』 第四卷 史料編文化財 一九八九年
- (17) 山口泰弘「伊勢の曾我蕭白」 國華 一一五二号 一一九一年 山口泰弘「曾我蕭白の遊歴」 國華 一一六一号 一一九二年
- (18) 山口泰弘「曾我蕭白「旧興正寺障壁画」の主題と空間構想」 三重大学教育学部研究紀要 六十三卷 二〇一二年
- (19) 山口泰弘「曾我蕭白の遊歴」 國華 一一六一号 一一九二年
- (20) 展覧会及び図録「江戸絵画の鬼才 曾我蕭白展」一九八七年 三重県立美術館・練馬区立美術館蕭白展図録